

princess Lover!
プリンセスラバー!
シルヴィア・フォン・ホッセンの恋路2

空蟬

原作：Ricotta / 表紙：こもりけい / 挿絵：吉飛雄馬



立ち読み版

二次元ゲー文庫



登場人物紹介

Characters



シルヴィア＝ ファン・ホッセン

フィルミッシュ公国の筆頭貴族で
代々騎士を務めてきたファン・ホッ
セン家の長女。皇帝から授かった剣と
鎧を公の場に必ず身につけて行くほ
ど騎士としての誇りが強い。真面目
を通りこして堅物だが純粋でまっす
ぐな性格の持ち主。愛称はシルヴィ。





ほうじょういん せい か
鳳条院 聖華

秀峰学園の社交部代表。新
進気鋭のファッションデザイナー
でモデルもこなす才女。

**シャルロット＝
ヘイゼルリンク**

日本に留学中のヘイゼル
リンク公国の第一王女。
気さくで明るい性格で、楽
しいことが大好き。



**マリア＝
ファン・ホッセン**

天使爛漫で明るい性格の女
の子。姉のシルヴィアと哲
平の恋路が気になるおませ
なお年頃。

ふじくら ゆう
藤倉 優

有馬家に仕える哲
平の専属メイド。細
やかな気配りで主で
ある哲平を支える。

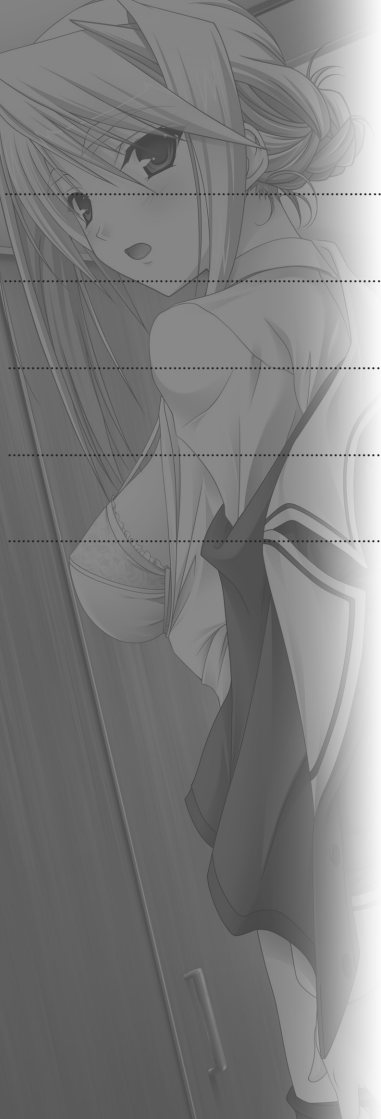


**ヴァインセント＝
ファン・ホッセン**

シルヴィアとマリアの父親。極度の
親バカで特にマリアを溺愛している。

あり ま てっぺい
有馬 哲平

祖父・一心の息子として、
有馬グループの跡取りとなっ
た新米セレブの少年。



CONTENTS

◎第一幕
昨日まで、そしてこれからも.....7

◎第二幕
騎士であり、されど女でもあり.....56

◎第三幕
恋は順風満帆、なれど奇特な親子関係.....115

◎第四幕
そして、それから.....170

◎最終幕
つながる未来～愛しき人とともに～.....215



「つは、ふ、うう……もうこれ以上は辛いのでしょうか？　ですから、私が……ぬ、ぬ、脱がせて、ああ……っ」

シルヴィア自身昂^{たかぶ}つて、早くじかに牡の熱を感じたがっているのだらうに。内実を押し隠し、荒い息を愛しい膨らみに吹きつけながら、途切れ途切れにか細く申し出る。

そんな彼女の不器用さが、たまらなく愛おしい。

「ん……早く……お願い」

「あ、ああ。そら、腰を浮かせて。ふ、あ、ああ……！　下着の中の熱気、すごい……」

恋人の手でベルトを外され、ズボンとトランクスと一緒に脱がされる間中。脱がしやすいうちに腰を持ち上げた哲平の股間の物は、欲熱と鼓動とを放ち続けていた。

「ああ……なんか、風が、涼しいや。……うっ」

脱げ落ちたズボンを見下ろして、涼やかな心地にまどろむ暇もなく。剥^むき出しの肉棒が真つ白な手に覆われる。青筋浮かせた、少し汗ばんだ砲身^{いんと}を厭^{いと}いもせず、むしろうつとりとした手つきでなでさすられて、少年の背に快樂の電流^{はし}が奔^{はし}り抜けた。

「あなたに、風邪を引かせるわけにいかぬから。も、もう、こんなに脈打つて……ッ」
口の中に溜^{ため}まった唾^{よだ}を飲み、碧眼^{へきがん}を物欲^{ぶつ}しげな輝きに満たしたシルヴィアが、口ずさむように声を紡ぐ。

「う、く……。シルヴィ、は、早くっ」

わずかのぶれもない熱視線を受け止め続け、覆う物のない股間がさすがに羞恥のうめき

を上げた。

「そ、そう急せくな。すぐに……愛でてやる」

手の内で感じた牡の鼓動と、焦れたような腰の震え。少々情けない声の響きにすら昂奮して、金髪の乙女はなおのこと声に艶を混じらせる。

「あ、はあううっ……！」

爛たれた吐息とともに吹きかかるささやきの、甘苦しい響きにまで侵されて。たまりかねた肉の幹がビクビクと歡喜の鼓動を伝えた。

同時に逆襲したい気持ちはが湧き起こって、顔の真上でもじつく恋人の股間へ、そろり。右手の人差し指を這はい忍ばせる。

「あ、ふあつ!? こ、こら、ああつ……悪戯は、く、くすぐった、やあ、んんっ……」
案あんの定、不意をつかれた形の恋人が抗議の声を上げた。

けれどその腰は指の愛撫を受け止めるように眼前にとどまったまま。わずかにもぞもぞと左右にくねって、快樂の証あかしである蜜を少年の指先ににじませる。

「悪戯いたずらじゃ、ないよ」

愛しい想いを伝えたいのは自分だって同じなのだ。そう言葉で伝える代わりに、いっそう速度を上げた指の腹で恋人の股間をさする。

「くふ、うつ、うあああ……っ、せ、切なくなってしまう、からあ……！」

身体からだの線が出るほどびっちらの白いウェア。けれどその下には下着を着けているはずだ

った。幾重もの布地を染み抜けて、軽く押すだけでプジュプジュと漏れ出る蜜汁の卑猥な音色が、はつきりと哲平の指先に伝わってくる。

「ほら、こんなにプニョプニョして……押すたびに、ジワジワ染み出てきてる」

そろりと軽くめくってみた、ウェアのズボンの内側は想像以上に粘ついた熱を孕^{はら}んでいて、知らず知らず鼓動が弾む。

覗いた先で純白のレース下着がくつきりと、薄い恥毛に彩られた割れ目を浮かび上がらせていた。まばゆい光景に魅了されつつ、丸い肉を食い込み気味に包まれた、その臀部に触れてみて、柔らかさとぬくもりとになおいつそう胸と下肢を高鳴らせる。

「み、見てはだつ、あ……！ さ、触るのもだめえつ」

鼻先と、股布を咥^{くわ}えた唇とを使つて、彼女のズボンをずり下げていく。どんどん濃くなる彼女のにおいにあてられて、鼓動はひっきりなしに昂^{たか}つていった。

「うあ……！ つは、ああ……いい、よ。シルヴィ」

呼応してか、それとも恥じらいにまみれた顔を隠すためか。熱い息を吐く鼻先が肉棒へと押しつけられてくる。ねつとりと絡む吐息の熱と、乱れた呼吸のくすぐたさに、また肉棒が震えて啼^ないた。

「あなただつてこんなに……しているではないか、ふ、う……れるうつ！」

「っあ！ 舌、絡んで、うああああ……！」

不意打ち気味に舌先でなめられた。悦^{よろこ}びが甘いしびれとなつて背筋を駆け抜ける。と同

時に、もつと自分も愛でてあげたいとの思いが、爆発的に膨れ上がった。

「そう、か……。これがいいのか。んう、ちゅ……。んちゅ、ちううつ」

「んはあつ……！」

いつになく積極的な恋人の姿に驚きと、愛しさが広がっていく。

舌のざらついた部分で亀頭をていねいになめ扱かれて、ゾクゾクと込み上げた快感が腰の根元に堆積する。吸いつく唇のぷりぷりとした感触に上下から挟まれて、腰全体が蕩けてしまいそうな心地を味わった。

「……うっ！ シルヴィのもの、なめて……。あげるっ」

お返しに、目の前でもじつく股根——たつぷりの蜜汁でぐしよ濡れのショーツへと鼻先を押しつけ、すうう……と大きく深呼吸。拍子にぷちゅりと、染み出た蜜の浅ましき淫音が響く。

「ひあ!? ば、ばかつ、そんなところを嗅いでっ……。あふううつ!?」

「れちゅっ……。ちゅっ、ちゅづるるるうつ」

間髪いれず、薄いレース生地ごと奥にしまわれた乙女の股肉を吸い上げた。唇でショーツを食み、染み出す蜜汁の酸味と塩辛い汗とを啜る。

背徳的な高揚に満たされた胸に甘酸っぱくも愛しいにおいを溜め込んで、逃れようとよじれた股間の中央へと舌を伸ばす。そのまま透けて見えるブロンドの茂みを乱すように、舌尖を使って恥丘を掻き回した。

「あむつ。ん……っ、れぢううううつ」

「は、あああ……ッ！　っひ、あくうあああ——っ！」

持ち上がった恋人の尻肉をわしづかみにして、引き寄せた。腰に左腕を巻きつけ、逃^ふげ道を塞^{ふさ}いでしまつてから舌を着地させる。

湿ったショーツは唾液でますますぬめりを増し、割れ目に食い込むように貼りついて。浮き立つ縦スジの端。哲平は、ひっそりと膨れて自己主張している、小粒の陰核へと新たに狙いを定めた。

「恥ずかしっ、からあ……っ、あ、ああっ、は、アアア……音っ、立てないでええっ！」

言葉と裏腹にすがりついてくる。意固地な恋人の股間に鼻先をうずめ、しっかりと抱き留めて、震える肉の芽を舌の腹でこね潰した。

「ひぐっ！　ひや、ああはあっ！　そ、こっ！　強いつ……刺激、強すぎるっ、のおっ！」

「れぢゆうっ……酸っぱくって、甘い。シルヴィの、味がしてるよっ」

一気に噴き出た酸味と甘味が口の中から胸一杯に広がるにつれて、股間のたぎりも加速度的に増してゆく。

「んうあつ、ひああっ！　私、だつてええ……ちゅっ、ちゅうううっ、はふ、うう、ああむうう……！」

「んくあつ！　し、舌が絡んでっ……」

器用に亀頭をくるむように巻きついてきた恋人の舌。ねっとり火照^ほった唾液をまぶし、

その上から被^{かぶ}さつて熱をコーティングする。キュウキュウと締めつけながら、肝心のタイミングで——肉棒が歡喜の脈動を伝えるたびに刺激を緩めてしまう。

愛しくもじれつたい愛撫に、切ない衝動が少年の股間を駆け抜けていった。

「っは、はあ……っ、は、アアア……っ、んむうっ！」

腰の根元に染み出した肉欲の塊をやり過すため。そして、もつと自分以上に恋人に気持ちよくなつてもらいたい、その一心で。とつくに唾液と愛液とで湿りきつたショーツへとかぶりつき、浮き上がる縦スジを重点的になめ上げていく。

「んむっ!! てっ、てっふえいつ。今は私がっ……ひううっ! っく、ぢゅりゅ……!」

抗議の声も半ばに、火照りをまとつた唇が肉棒を包み、食んで、強烈に吸い上げた。熱にまみれた口内に押し包まれ、唾液の海に浸^{ひた}されて、そのまま火照りに溺^{おぼ}れてしまいそうな錯覚に囚われる。

ぎゅっとしがみつく恋人の胸の弾力が、へそ下あたりに密着する。シルヴィアの火照りに包まれて、腰がひとりでにぬかるんだ口中へと沈み込んでいった。

(や、ば……も、おっ……!)

腰の芯が、孕んだ甘苦しい塊を吐き出そうと、しきりに鼓動を打ち放つ。その都度電撃のように鋭い快樂振動が腰椎^{ようつゐ}を駆け抜け、脳天まで突き上がる。

「あぐ……ああっ!」

嘔み締めた口の端から、吸い絞った酸味と一緒に、こらえきれない愉悅の声がこぼれ落

ちていった。

いつしか自分からも腰を押しつけ、恋人の頬裏で、齒茎で、舌先で肉棒を摩擦する。

「はぷうつ……んんっ、ん——っ！ てっふえい、てっふえい……っ！」

息苦しくて喉元にえづきが込み上げているだろうに、それでもシルヴィアは亀頭に吸いつき、手放さない。

逆にいつそう深く、肉棒の根元までを咥え、牡の猛威を受け止めてくれた。

「んぷあ……っ、っは、ああはッ……嬉ひっ、のおっ」

口内一杯にたゆたう唾液をまぶすように、肉幹全体を余すところなくめしやぶる。

喜びにまどろむさなか、もごもごとくぐもった響き。それでも確かに、哲平の耳に恋人の「嬉しい」という言葉は届けられた。

（……っ！ あり、がとう……シルヴィ）

喜びと、悦びとで、心と身体、共に満ちてゆく。途端に腰の芯から迫り上がる肉の鼓動を、もはや我慢しようという気すらなくしていた。

（このまま、シルヴィの、中にくるまれて、この、ままああっ……！）

吐き出してしまいたい。ぶちまけて、刻みつけて。逆に、しるされて。おたがいの想いを、快楽を、心ゆくまで共有したかった。

「ふぷうつ、ア……！ てっ……ぺええっ、わた、しもっ、わたっ、ひっああアアア——！
ぷしやつ——！

「んぶうツツ！——くくくツツ！シルヴィ……俺、もつ……ツツツ！！」

鼻先をくすぐるように跳ねた恋人の股の中心で、ひと際^{きわ}熱い液が染み出してきた。と同時に、堰^{せき}を破る勢いで、肉棒の内をたぎりにたぎった熱の塊が駆け上る。

「んぶあ……っ！んあ、あ——っ！てっふえいいいいっ、ぢゅっ、ぢゅづりゆるるるるるるるうう！」

尻を揺すり、いつそう強く少年の唇へと跳ねる腰を押しつけて。繰り返し押し寄せる絶頂の波に晒され、背を反らせながら、それでもなおのことシルヴィアの吸引は凄^{すさ}まじく、中身を搾^{しぼ}り取る勢いで肉棒を吸い上げ、なめ回す。

（シルヴィっ、シル……んうっ！ああアアッ！）

お返しにむちやくちやになめ扱いた陰核と、その下の割れ目が痙攣し、いつそう大量の蜜汁が噴き出すのと、目一杯恋人の喉元に押しつけた肉棒の先から、凝縮された白濁が噴き出すのが、ほぼ同時。

「ぢゅむううう！ツツくくく！！ま、たあああつ、くるうっ、強いのが、腰の奥にいつ！ひっ、ああ！んぶッうあああああああ……！！」

たまらず喘^{あえ}いで、また唇で肉幹を吸い絞る。その愛しい恋人の口内へと、溜まりに溜まった想いの丈^{たけ}が、注ぎ込まれていく。

どくうっ！どくっどくどくどくっ！びゅっ……びゆるるるるるぶぶうっ！

「んぐっ！んっ、んんむっ！ぢゅっ、んぐっ、んっ、んんぐううう——っ！！」



「ひんうううっ！ あ、あ……ッあああ……!!」

今度は喉を反らして悶えた、と同時に幾束かほつれた金髪が銀の胸当てに舞い降りて、見目麗しき彩りを添える。美しくも、どこか淫靡な印象を受けるのは、きつといつもの凜々しいシルヴィアの象徴——きつちり結び上げた金髪と、誇りである鎧、その両方を乱しているから——。

（いつも以上に、絡みつくっ。それにすぐねつとりとした感じで……っ！）

とっさに唇を噛み締めていなければ、あえなくすべてをぶちまけてしまうところだった。それほどに膣内のうねるような歓待は凄まじく、視覚的な高揚も拍車をかけている。

彼女も、これまでの自分を打ち崩すかのようなこの状況に昂奮しているのか。哲平の疑問に答えるように、乙女の肉ヒダは侵入者を歓待し、貪欲にすがり、絡みついてくる。

「うあ、あつ、く、ふうう……！ 奥、までっ、きてる、ううっ……あはああ……！」

きつく抱き締めた彼女の両脚もお返しとばかりに、またより深い刺激を求めるように哲平の腰に巻きついてきた。

「あ、あ……っ。脚……痛くない？」

「だ、大丈夫っ、だからっ……っ！」

早く、動いて——。人一倍羞恥心の強い彼女の口から、直接懇願の言葉を聞くことが叶わずとも、潤み見つめてくる青い瞳が、すべてを物語っている。

「少しだけ……じつとして……っ」

「ふ、え……？ きやつ……」

できるだけ彼女の脚に負担のかからない体勢に――。腰元から迫り上がる快感をこらえ考えた末に、哲平は恋人の腰を抱き上げ、自らも起き上がって、あぐらを掻いたその上に彼女の尻肉を下ろしてしまふ。

おたがいの顔を見つめあえる、対面座位の体勢。

「つぶ、深、いいっ……！」

それは図らずも、シルヴィアが望んだ通り。正常位の状態以上に深くつながりあえる体位だった。直立に突き刺さるように子宮を押されて、喘ぎも途切れ途切れに、ほつれ髪を乱して乙女が悶える。

「っは、ああ……っ！ シルヴィ、あんまり動いたらすぐに……っ」

一方、哲平は安産型の尻肉に敷かれ、感極まった膣肉の締めつけにも襲われて、再度腰の芯から込み上げる射精の予兆に脅かおびやされていた。

おたがいの荒く乱れた吐息が吹きかかる距離で見つめあい、どちらからともなく抱き寄せあつて、自然と唇同士が重なっていく。

「ん、ふう……。シルヴィ……」

「ちゅ、ちゅうう……っ、あ、ああ、頼むっ……」

頭から腰までびったりと寄り添って、そのまま緩ゆるやかな抽送が開始された。

ぬぢゆるうう……っ、ぢゅぶ、ぶぢゅぢゅうっ！

「う……っ、は、あっ……ッ！」

馴染ませるようにじつくりと腰を押し込むたび、力を込めた哲平のへそ下に甘い衝動が蓄積する。

「ひやあううつ！ は、ひあ……っ、硬いのが、ひっ、かかつてえ……っ！」

引き抜く際にはカリ首にびつちりと吸いついた肉ヒダが剥がされてゆく。吸われながら肉洞を抜けるカリ裏にも、引き剥がされた肉ヒダにも、電撃の如く鋭い甘美なしびれが充満していった。

「ふ、あつ、あああつ！ 胸えっ……」

恋人はしきりに胸元の疼きを訴え、身を揺する。その求めに応じるようにいったん抽送を止めると、ひと息ついた哲平にも少しずつ余裕が生まれてきた。

（ッ……これで、もう少しはもつ、かな？）

深く、息を吸うたびに、うねる膣肉の感触が勃起を通じて少年の腰骨にまで浸透する。もどかしくも、切ない刺激に押されて、ゆるゆると、焦れた肉棒はまるで催促するみたいに膣壁を擦り始めてしまう。

「ふう、あつ！ あとちよつと、だか、らあつ……脱げ、たつ……あはああ……！」

悶えた恋人の腰が右向きに曲がる。膣内でねじられた格好の肉棒が、声なきうめきを上げて甘く疼く。

「うあ……っ。シル……ヴィ？」

——ガシャンッ……。

大切な鎧の一部は、あるじ自身の手で外され、そろりと、ベッド下に降ろされる。それでも重たげに響いた金属音は、まるでシルヴィア自身の責任感と頑なさ。背中合わせの二つの感情の象徴のように、哲平には思えた。

だとすれば彼女は、今、自らの手で頑なな殻を脱ぎ捨てたのだ。

「うう……ううっ。どうして、は、早く脱げてっ」

もどかしげに、焦る手つきで礼服のボタンを外していく。現れた白いブラジャーを震える指で外し、こぼれ落ちた双乳を弾ませ、熱くて甘い吐息を漏らした。

「シ、シルヴィ……っ」

恋人の悩ましげな仕草一つ一つに、膣穴深くに埋め込んだ肉の楔が逐一反応し、ますます猛って肉壁を抉り立ててゆく。そして彼女のさらなる媚態を引き出し、またギチギチと絡む膣肉に歓待されて、少年も熱い、愉悅混じりの吐息を吐きこぼすのだ。

「これでやつと……肌と肌で触れあえる。ああっ……哲平いつ……!」

ぎゅううっ——。力一杯強く抱きつかれたものの、生身の柔らかさのおかげで少しも息苦しさは感じない。むしろ彼女の胸元の大きなクッション二つ、押し潰されたその肉感の心地に、ドクドクと股間の芯が歓喜の鼓動を打ち放つ。

「んあっあああ! 中で、あ、暴れてっ。ほ、本当に現金なっ、ものだっ、ああふっ!」
口を尖らせ苦言を呈しながら、けれど彼女の側から積極的に二つの膨らみは押しつけら

れてきた。左右それぞれの丸みの頂上で、ツンと尖った硬い感触。それがスリスリとカッターシャツの上から擦れ合わされる。

「ふあ、あつ、ああはッ！ しび、れるうつ、胸の先がたまらなく、疼いてええっ」

恋人の甘い声にも煽られて、乳首同士擦れた際の甘い刺激は幾倍にも膨張。そのまま背筋を下り、少年の腰の芯にまで突き抜けていった。

「はあ、あぐっ……！」

ずぶぢゅうつ！

こらえきれず抱き寄せた、膣穴の中心を思いきり決る。

「ひうんんっ！ あ、ふ、うう……っ、てっぺ、えっ。ひやうつ、んっ、んあああああ！」

後はもう、無我夢中。シルヴィアがはしたなく腰を振りながら尻を落としてくれば、応じて哲平も真下からベッドの軋みを利用して突き上げる。

「てっ、ぺえのっ、あ、熱くっ、たぎって、ええっ！」

「シルヴィだつて……！ いつもより中が茹だつてっ、溶けちゃいそう、だよっ……！」

これまで両手の指で数え足りないほど睦みあつてきた。けれど今夜ほど熱を孕んだ相手を感じたのは、おたがいに初めてのことだ。

「そう、か、私も火照って、ッあ！ あはあうつ！」

やがて熱も混じり、まるで二つの身体が溶けあつたが如き錯覚に陥る。おちい

「ずっと、こうしてたい……」

間近に下りてきた子宮口を亀頭ではね上げて、コリコリとした感触を味わい、いっそう腰の芯が歓喜にしびれゆく。喘ぎ混じりに漏れた哲平の声に、シルヴィアも繰り返しうなずき、同意を示した。

「あ、ああ、わた、しもつ……哲平とずつとこうして、いたいっ。十年後も、それから、年老いてもずつと、ずつと……おっ！」

瞳に涙を溜め、切に響く。彼女の心底からの訴えに胸が詰まり、同時に膨らんだ愛しさを糧にして、肉棒が狭い膣内を占拠する。

「約束するよ……いつだって俺は、シルヴィアの隣にっ、ずつと……っ、約束する！」
ぬぶ、にゅりゅりゅう……ぢゅぶぶぶうッ！

「くひうっ！ ふ、かつ、ひっあああああ……！」

想いを込めて、いったん引いた腰を深々と、最奥まで突き入れる。

哲平の想いと熱のこもった一撃を受け止めた膣肉もまた、内部のヒダが複雑にくねり、吸いついて、幹肉を離すまいときつくしがみついていた。

押しつけられた恋人の双乳の先端。小指の先ほどにまで膨張し、尖った乳首のしこりが擦れるたびに、背筋が震える。刺激を伝達された哲平の肉棒は際限なく膨張と、鼓動を繰り返し、シルヴィアは両手を少年の首に巻きつけてひたすらにしがみつく。

「っひ、アアア！ ああ……っ！ わ、わた、ひィッ！ も、もおお！」

上目遣いでしきりに訴えてくる。膣肉がひと際キュウキュウ狭せばまって牡肉を食み、たっ

ぶりの蜜なしでは抽送もままならぬほどになる。

彼女の身体にも「その時」が迫っているのだと、哲平もまた勃起の根元から染み上がる絶頂の予兆に襲われながら、悟っていた。

「俺も、一緒に……もうすぐ、イける……からっ！」

「ああ……！ ん、むっ、ちゅっ……ちうううっ！」

唇と唇、舌と舌を絡めたまま。息苦しいのも忘れて二人、腰のリズムを合わせ律動する。ばちゅっ！ ぶばんっ！ ぐぼっぢゅぶぢゅぶ！

ネトついた淫液の量が一気に増して、ますますおたがいの腰の速度は、肉欲の量とともに跳ね上がった。

ぎゅちゅぎゅちゅうううっ！

「ひうつあ、ああッ！ やっ、あはあうううッッ！」

目一杯締め上げてきた膣穴に応じるように。

「……ッッ!!」

連なり重なる肉ヒダを貫き、同じく目一杯奥へと腰を押し込む。なおもすがりついてくる汁まみれのヒダ肉にみっちりと包まれて、温みと肉の痙攣けいれんとに脅かされ。随喜ずいきの衝動に抗えず、白濁の塊が爆ぜ散った。

——どぐんっ！

「あはあああああああ——っ！ 熱いのっ、中にいいっ！ 哲平で満たされてえええ



っ！ イッ、イクうううっ！」

——ぎゅちイッ！ びぐううう！ びゅぐつびゆるるうっ！ どぐつどぐどぐうう！！
初弾を浴びた膣口がチュウチュウと亀頭に吸いついて、搾り取られるがまま。こじ入れ
た肉の砲身から、肉悦の奔流がほとばしる。

「っあ、あ、あつ……全部っ、シルヴィの中でっ、出すからっ……」

「ああ……！！ あなたの想いのすべてをっ、中に、ひあ！ あっあつくふううう！！」
抱き留めた腕の中で何度も真つ白な肌が跳ねては崩れ、また跳ねて。その都度深くつな
がりあう性器同士の隙間から、たがいの悦びの証である白濁と、淫液があふれてゆく。

「んっ……っふ！ んむう、てっふええ……っ！」

波打つ下腹を少年の丹田にびったりと押しつけて、イキ果て震えながら彼女は口づけを
ねだった。

（うあ、ああ……っ、舌が絡……まつて、え……っ）

積極的に己のそれに絡みついてくる恋人の舌。そのぬるりとした感触と、淫猥な動きと
に翻弄され、いっそう哲平の腰元から噴き出る欲熱は勢いを増していく。

「ふうむっ！ んっちゅ！ ちううつ、れちゅ……ひふあっ！ また、中で震えれえっ、
んぢゅううつ！」

活きのいい子種に激しく子宮を叩かれた乙女が、金髪をなびかせ甘美の声を忍ばせる。
——どくっ！ どくどくどぶううつ……！！

射精の衝動が哲平の腰の奥と、シルヴィアの子宮になだれ込む。その波は潮が引くように緩慢に、ゆっくりと霞んでゆく。

「ふあ……っ。っは、あああ……てっ……ぺいいいっ」

痛みを忘れたみたいない力強さで、シルヴィアの両脚が哲平の腰を抱き寄せる。

「ん……ちゅっ」

またキスのおねだりを甘い声でしてくれた、恋人の唇を即座に塞いで舌を吸う。余韻を愉しむかのようにおたがいの身体を擦り合わせ、手と手をつなぎ、彼女の乳首に己の乳首を扱かれる、こらえがたい肉欲に酔い痴れながら。哲平は、頭の芯から、底なしの幸福に陶酔していくのを実感していた。

「ちゅ、う……っ。んふあっ……はふううっ。結局、あなたの言う通りに乱れてしまった、な……」

ぼそりと恋人が漏らす、その響きは照れと恥じらいと、悦びとを均等を含み。各々が胸に満ちた至福の時を堪能しようと、寄り添い、そしてまたキスをする。

「嬉しかった。シルヴィアが全部を俺に見せてくれた気がしたから」

「……それは、身体の隅々まで、という意味ではなかるうな」

照れ隠しからか珍しく拗ねた様子を見せる。そんな彼女もまた愛しくて、今度は前髪を掻き上げておでこに唇を捧げた。未だ残る余韻を呼び起こされて身震いする、その華奢な肩を抱き締めて。

「文句言いながらちゃんと応じてくれるシルヴィが好きだよ」

「そ、そんなおべっかなどで、もうごまかされたりしないぞ」

横で恥じらいうつむいた彼女の姿——フリル多めのウエディングドレスに包まれたシルヴィアのまばゆさに目を奪われ、しばし高鳴る胸を押さえたまま魅入ってしまう。

『二人きりで、こっそり見るだけ』

そう言つて頼み込んで着てもらったのは、もちろん本番用ではない別のドレスだ。それでも、花嫁衣装に身を包む恋人は見惚れるほどに美しく輝いて見えた。

「夢、みたいだ……」

もうじき目の前の女性が、自分の妻になる。共に暮らしていくことになるのだと、考えただけでも胸躍る。

婚約者の視線に晒さらされて恥じらいうつむきながらも、まんざらでなさそうに微笑む。常は理知的な彼女が見せる不器用な照れと愛情表現。

愛おしい人がまとうドレスはよりいっそう輝いて瞳に映り、哲平の胸に熱い想いを込み上げさせる。

「あ、あまりじつくりと見ないでほしい」

「どう、して……?」

絵物語の中からそのまま出てきたお姫様みたいだ、なんて告げれば、きっと耳の先からうなじまで真っ赤にして愛らしい顔をうつむかせ隠してしまう。だから、あえて賛辞を吞

み込んで、その分見つめる視線に想いをたつぷり詰め込んだ。

「う、うう。こういう衣装はやはり私には似合わない」

「そんなことない。よく、似合ってるよ」

自信を持って——そつと近づき、耳元でささやく。

「そ、それに……少々胸元が開きすぎではないか？」

耳朶^{じだ}がくすぐったかったのか。恋人は一瞬背筋をビクンと震わせ、その震えを乗せたままの声であわただしく言葉を返してくる。

「そう、かな。普通だと思うけど」

「そんなことはない。見ろ。上から覗くと胸……が、その谷間まで」

見ていいの、とは問い返さなかった。せっかく彼女のほうから申し出てくれたのだ。シルヴィアに気を許してもらっている、その喜びを噛み締め、さらなる喜びを手にするべく視線をドレスの胸元へ移動。

「お……」

確かに、シルヴィアが選んでいたドレスたちからすれば、うなじから肩口を露出し胸元も開き気味の衣装は過激に映るかもしれない。

けれど唇を尖らせてくれる恋人の表情がたまらなく愛らしくて、少年はわざと口をつぐみ、魅入ってしまう。

「だいじょうぶ。見てるのは俺だけだし」

「だいじょうぶじゃない。あなたがじろじろ見るといことは、その、そういうことなのだろうっ？」

視線がむず痒いのかしきりにもじつく様子も、編み上げた金髪を包むヴェールから透けて覗く、羞恥に溺れて耳の先からうなじまで真っ赤になった姿も。何もかもが愛おしくて、ますます胸の鼓動が高まってゆく。

「そういうって。どういうこと？」

「う、うゝっ。本当に……意地悪な人だ」

じゃれあうように交わす言葉までもがむず痒く、もどかしくて、だが、とてつもなく愛しく思えた。

「ほ、鳳条院に気づかれたのではないかつ？」

「んゝ、そうかも。汚さないでよって釘刺されたし」

知り合いに情事のことを見透かされるなど羞恥の極み。そう言わんばかりにぼつと赤らんだ顔をうつむかせてしまう。その恋人の視線を追いかけて、うなじへと軽く唇を押し当てる。

「ふ、う、あ……っ。てっ、ぺえい……っ」

恨めしそうに、それでいて艶をたっぷり含んで啼いたシルヴィアの潤んだ瞳が持ち上がったのを見て、昂る愛情の命じるがまま。両のまぶたにもキスの雨を降らせていく。

『一着だけ持ち帰っていいかな？』

そう尋ねた時の聖華の、きよとした顔が見る見る剣呑^{けんおん}に変わっていく様を思い出す。しまいにはあきれた顔をしてため息を吐いた彼女に内心で謝罪をし。

(これから、花嫁姿のシルヴィと……！)

純白の花嫁衣装を着た恋人と、身も心もつながる。身一つに有り余る想いが激しい動悸^{どうき}となつて胸奥を叩くのをどうにかこらえ、抑えきれない鼻息を漏らしながら、ゆつくりと腕の内に花嫁を抱き招く。

「シワに、なつてしまう……から、あつ……」

言いながら彼女も、ヴェール越しの顔を胸板にすり寄せてくれる。しばしおたがい口をつぐんだまま。相手のぬくもりを味わうようにただじつくり、静かに抱き締めあい、温めあつた。

「じゃあ……いいかな」

「いやだ、などと言つてもするのでしよう」

ヴェールの奥で口を尖らせた花嫁がこぼす。

その無邪気にむくれた表情を見たくなり、そつと哲平の指がヴェールをまくり上げてゆく。

「本気で嫌がつてるならしないよ。でも、シルヴィが本当はして欲しいって感じてゐるなら」
「やはり、こういう時のあなたは意地悪だ……あつ」

現れた彼女の顔は予想通り。いや、予想以上に無防備で、愛らしく。保護欲と支配欲、

相反する想いが哲平の胸の内で燃え盛る。

パートナーの荒く乱れだした鼻息で胸元をくすぐられ、喘ぎながら立ち上がった。その彼女の白い指先が、震えながらも白く長いスカートへとゆっくり。焦らすみたいなスピードで伸びていった。

すると彼女自身の手でめくり上げられてゆく、純白のスカートの中身を期待して、ドクリと若い牡の股間が鼓動を伝える。

「ごくっ……」

そつと飲み込んだはずの生唾なまつばがやけに大きな音を立ててしまい、ついに胸の鼓動はうるさいくらいに鳴り響き始めた。

「こ、これでいい……か？」

ベッドの真正面。もじつく脚で立った花嫁の、薄布一枚で覆われた股間が、ちょうど少年の視線の真ん前にあつた。

「は、恥ずかしいからあまりつ、そうじろじろとつ。見、ないでっ」

（見るなって言われても……っ）

さすがにそれは無理な話だ。

薄手の、上等なレース生地で編まれたスカートの向こう。しきりに小刻みに揺れている太ももの、きつく閉じられたその谷間で、同じく純白のショーツが輝いている。緊張から汗ばんでいる彼女の腿肉から、そして押し込められた下着の奥から、甘い芳香がにおい

立つように感じられて——視線と唇とが吸い込まれるように惹きつけられていった。

ちゅっ……。

「ふあ！ や……どこに口づけて、っふ！ んんう」

「ん……柔らふあい」

押しつけた唇と鼻先で恋人の恥部の柔らかな肉感を愉しみ、吸い込んだ空気と一緒に甘ったるい体臭まで肺に吸入する。

「ひう！ 口をつけたままっ、もごもごするなああ」

それだけでも高揚いっちょ著しいのに、突然の愛撫に驚き震えながら啼く恋人の嬌声きよせいに耳朵を蕩どろかされ、ひっきりなしに股間の膨らみが鼓動を奏で始めていた。

「ま、待って、つく、ふうアア……ッ！」

じかに触れられること、中でも股間でのスキンシップに弱い恋人が切なげに啼く。むずかるように、悶えもたながらくねる両腿に少年は両腕を巻きつかせて拘束し、いっそう強く鼻先を押しつけていく。

「……ッ、ああ……！」

触れあう肌と唇とで伝えあう熱の心地に、少女が切なく股肉を震わせた。

「敏感、だね……」

恋人の膣肉の反応を下着越しに想像する。ただそれだけのことで、じかに触られたわけでもないのに肉棒がトランスに擦こすれるほど硬く張りつめ、ズクズクと浸透する甘美なう

ずきに悶々^{もんもん}とさせられた。

「つく、ふ、あ……ああつ……。く、すぐつたい、から、ああつ……」

(染み出て……きてる……つ)

押しつけたり、離したりを繰り返すうち、鼻先に立ち込める甘みが濃くなって、ジワリと染み出た蜜の湿り気が、温^ぬみとともに伝わってくる。期待に弾む少年の口中に、自然と唾液があふれ溜まっていた。

「てっ……ぺい？ ま、まさかっ……ふあ！ ああ!!」

「ちゅ……んむっ……ちゅづづづっ！ つぶあ……んっ！ 甘酸っぱい……っ」

パートナーの表情から心を読み取ったらしいシルヴィアが制止しようと伸ばした、その右手が届くよりも早く。哲平の舌先がべたりと純白のショーツに貼りつき、唇はまるで下着ごと食^はむように膣肉を圧迫し始める。

「ん、うう……あッ！ だ、めっ……そこは汚い、つああ！ ふあ、あ、あ、あア……！」

ヒクヒクと下着の奥で震える陰唇の微細な振動までもが、ぴったり貼りつかせた舌先にもれなく伝わってきて、ますます牡肉は鼓動しながら勃起する。

「れちゅ……うっ。んっ、んんっ」

すでに下着の中心のスジに沿って浮いていたシミを広げるように、尖らせた舌先で割れ目をなぞり上げていく。止め処^どなくあふれる蜜汁を下着ごと吸って飲み下し、膣肉の震えを湿った布地越しに感じ取って胸躍らせた。

火照る腕を同じくらい熱くなつた恋人の脚に巻きつけ、抱き締めていつそうの密着を図る。

「うう……っ、あ！ も、もうっ。どうしていつもいつもこういう時のあなたは……強引つ、ふ、ふあ!! あっああああ〜！」

汗ばんだ手のひらを滑らせて彼女の尻肉を揉みしだき、ますます恋人の甘い声が響き渡る、そのたび。

膨れた肉棒が跳ねて、擦れた下着との間にトロトロと透明の先走り汁を吐き漏らしていた。腰の芯に溜まる肉欲のたぎりが背筋から脳天まで間断なく響き渡って、徐々に少年の意識を侵食する。立ち込める愛液の温みとミルクじみた体臭の甘さも一役買って、哲平は舌愛撫へとただひたすら没頭していった。

「ふっ、あ！ ああ……そんな、ところま、でえ……っひ、ああ！ あああ〜っ」

拡がったシミの中心地。濡れた下着の食い込む割れ目を舌先でこじ開けるようにくすぐって、恋人の嬌声を引き出していく。過激な甘美を忍ぶためか、それともより快楽を貪ら^{むさぼ}んがためか。

スカート裾をつまんだシルヴィア自身の両手は純白衣装の胸元に強く押しつけられ、豊かな乳肉がひしゃげてしまっている。

その、たわんで脇からむにゆりとこぼれた淫^{みだ}らなシルエットをまぶたに焼きつけ、哲平は燃え盛る情欲のままに舌と唇とで恋人を愛^めでてゆく。

「ぢうっ！ ん……っ、ひよっろ、ひよっぱい……」

あふれた蜜汁は片っ端から啜り飲み、やがてたどり着いた割れ目の上端。ぼっちりと浮かぶ肉芽を舌裏で優しくなめ転がした。

「ひぐっ！ うあ！ 味、などっあアア……ッ！ そ、そこは、だっ、ああっ……刺激が強すぎるううっ！」

まるで雷鳴に打たれたみたいシルヴィアの肩先がビクリと大きく、飛び跳ねる。離れまいとつかんだ尻を揉みながら抱き寄せれば、下着越しにもはつきり居場所がわかるほど膨れた肉の芽から粘ついた蜜液が染み出てきて。ショーツのシミは見る間に大きく、より色濃く広がっていった。

「ちゅ、うっ……もう、ドロドロになっちゃってる」

「い、言うなあっ。どうしてあなたは恥ずかしいことばかりっ、いあ、ああ、言う……のだあ……」

シルヴィの恥じらう顔と、甘い声。羞恥に溺れ乱れた姿が見たいから――。

（なんて言ったら、また真っ赤になってうつむいちゃうんだろうな……）

特に、ハの字になって震えながら感じ入る、恋人の太めの眉がたまらなく好みだった。想像しただけで、いっそう肉の砲身が張りつめる。自分だけが独占できる恋人の痴態に想いを馳せ噴き漏らした、大量のカウパーでとつくに少年の下着の内もドロドロにぬめってしまった。

「ぷは……っ。下着の中……柔らかくほぐれたか、直接……確かめて……いい？」

「どうせ嫌だと言っても見るのでしょっつ。ふ、あ！」

鼻息に揺られて、ヒクヒクと純白の股間が震えた。股間に吹きかかる吐息がこそばゆいのか、つかまれたままの尻をモゾモゾ揺すってシルヴィアが喘ぐ。

声と同時に噴き漏れた蜜汁をまた啜^{えん}つて、少年は真下からまっすぐに恋人を見つめ、想いを告げた。

「シルヴィが本当に嫌がることはしない。約束する」

「その物言いは、ず、るいい……。っは、うう……。私が、あなたの想いを阻^{はば}めるはずないっ、のにい……。っ」

「責任、取るよ」

棒立ちで震える両脚を懸命に、わずかばかり開いて無言の肯定をしてくれる。恥ずかしがり屋の恋人との毎度のやり取りに不思議な安堵を覚えながら、期待に胸高鳴らせ、そろりと伸ばした指先で湿ったショーツを剥いでいった。

にゅ、ちゅああっ……。

「ふ、う……。あ……。あまり、じつくりとは、あ、ああ」

右側によじれめくれ上がってゆく布地とその奥の肉肌との間で、粘ついた糸が幾筋も垂れ下がる。

（においも一段と……。濃くて、甘酸っぱくて、腰の奥に響くっ……。シルヴィの、におい……

…

脳の髄にまで突き抜ける甘ったるい香り。理性を揺らがすにおいに苛まれながらも、下唇を嚙んで堪え、逐一恋人の表情を見ながら「共に昂つていく」ことに終始した。

「直接……するね」

目前で、今にも果てそうなほどに火照り、切なげに震えている薄桃色の膣肉。蕩けてわずかに開いた肉の割れ目へと顔を寄せ、漂う芳香を肺一杯に吸い入れる。鼻息で揺らぐ金糸の群れ——濡れきらめく恥毛をいっそう強い鼻息で搔き分け、奥の桃色肉粘膜から蜜が漏れる詳細な様を網膜に焼きつけていった。

「見すぎ、だあつ……。あ……。ま、待つ……。今、されたら、あつあああ……。！」

女性として一番大切な場所であり、もつとも秘すべき部分。陰部の奥の奥までを視線で貫かれて、両手をさらに持ち上げて、いっそうめくれたスカートで顔を覆い隠し恥じ入っている。照れ屋で真面目な彼女が、安産型の丸い尻を振ってむずかるのを見た瞬間。

「ひう!? そ、そこ、はあつ……。んっううう!」

尻肉をつかんだ右手の指先は、吸い込まれるように谷間へ——ひっそりと息づく小さな窄まりに擦りついていった。

「う、おあ……。っ、きつ、うっ……。」

「それはっ、あア……。あなたがいきなりそのような場所に触れる、からっ、ああ……。っ!」
頑固な彼女を象徴するように、尻の谷間の窄まりは触れてきた異物を拒むように強張り、

ヒクつきながら押しのけようと試みる。

「れるうつ……ちゅっ、ちううつ。んっ、んぷっ！ ぢゅちゅううつ……！」

恋人の強張りを解くように、肛門を指の腹で揉み込んでいく。その上で舌の裏をべったりと貼りつけて、濡れそぼつ割れ目をなめ上げまくった。

「ひあああつ！ ど、同時に……!! いっ、きなり強、いいいっ……。あ、ああ、ふあつ！
だ、っ……脚、も、もおっ……！」

「……ッッ！ っ」と

膝から崩れ落ちかけたシルヴィアの両脚を、しがみつくことでとつさに抱き留める。同時にばさりと恋人の手からこぼれたスカートが、少年の頭部をすっぽりと覆い尽くしてしまった。

「うわ、真っ暗……んちゅうつ」

「はう……っ！ すまな、いっ、今スカートを……っ、だ、だから舌っ。舌をいったん止めっ、て、くれえっ」

薄暗がりの中。スカートの内側にこもるにおいをたどり、より濃いところへと舌を伸ばし、触れていく。時折もじつく彼女の膝にぶつかりそうになりながらも、蜜汁を啜り、濡れた肉の割れ目をなぞるように、愛撫の手は止まることがなかった。

「ぢゅ……っ。ふえっ……くしっ」

黄金色の恥毛に鼻先をくすぐられ、顔を貼りつかせたまま、くしゃみをする。

「っひう!! い、今の、つ、あ、あアーツ」

震動が通じてぶると震えた、乙女の股肉に危あやうく顔を挟み込まかけて、あわてて退避。その際に噴き出した彼女の蜜液が鼻の頭にかかって、ツンと濃い臭気が鼻孔を潜った。

「どううつ……ぢゅつ、うううつ!」

少しずつ緩ゆるんできた窄まりの入口に右手中指を貼りつかせ、開門をねだるように軽く押し、こね回し。

淫らな香りに誘われるがまま吸いついた肉の割れ目で、また真新しい蜜が噴き漏れるのを感じ、尻穴をほじるたびに増していく蜜汁の甘みにはまり込んでいく。

「やふつ、う、ううつ! ひ、響く、うつ。あ、ああ、あー……っ!」

スカートで仕切られた密閉空間に立ち込める熱気と淫臭は、より濃厚になって牝の股間を刺激し続ける。

「んぶ、んッッ……!」

舌先の蜜の予想外のさらついた喉越しを味わいつつ腰を震わせる、そのわずかな刺激でさえ肉棒は過剰に受け取り、ドクドクと歓喜の衝動を掻き鳴らした。

「ふあ、あああつ……! 破裂しそうなくらい震えてるっ、あ、あなたの、もおつ……」

密閉空間の中で息づく牝の火照りに、鋭敏な彼女の肌は震えながら、呼応するように熱を吐く。

立っているのがやっとの彼女の視線が、じかに触れたいと言わんばかりの熱を込めて、

牡肉の膨らみあたりへと集中していた。

「ちゅ、ぷ……シル、ヴィっ……れちゅううっ！」

愛しさを胸一杯に詰め込んで、抱き締める代わりに膣肉を割り裂き、肉のヒダを搔き分けて膣奥へと舌を潜らせ。同時にほぐれた尻穴を鉤状に折り曲げた右手中指がぐぐり抜け、ぬかるんだ肛内へと果敢に攻め入ってゆく。

ゴムのようにきつい入口の締めつけを第二関節あたりに覚えつつ、腸液でしつとりと湿る腸内部のつるんとした壁面を軽く、繰り返し爪先でなぞり上げた。

「ひゃ、あつ、ああうう！ てっ、ぺ、えっ、てっ……っ！」

開発されきったアナルを弄られ、見る間に小刻みに震え始める膣肉の状況から、彼女の身に迫る絶頂の予兆を汲み取って、いっそう活発に、舌と指を前後それぞれの穴で暴れ回らせる。

「れぢゅっ、ぢゅりゆるっ……んちゅっ、ぢうっ！ ぢゅっ、ぢゅうううっ！」

ヒダとヒダとの隙間から止め処なく湧き出てくる蜜汁を搔き出し、啜り飲む。昂る肉棒を、自ら腰を振ることでトランク스와擦り合わせ、そのもどかしい刺激でますます頭と腰の芯を熱に浸し。

「うあ！ あっ、あふうあああつ！ ら、あめええっ……っ！ ひく、つふうううっ……っ！」

（もつと、もつと声を……聞かせて……！）

陶酔しきった少年は一心不乱に恋人の膾肉にかぶりつき、腸壁をほじくって、甘く甲高かんだかい乙女の嬌声を引き出してゆく。

「頭、どかしつ、てつ、えええつ。は、やつ、早くつ、うう……うう……つ！」

恋人が何かを我慢しているかのような切羽詰せうばまった声を上げ、腰を振る。いつもの「アレ」に近いのだとすぐに悟って、哲平の舌がより膾肉の奥深い部分をほじくりつついた。
ぢよっ……。

「ん、ぢゆつ。いいよ。全部……出して、いいから」

貼りつく頭部を押し出して閉じようとした内腿の間に肩ごと身体をねじ入れ、再度唇を割れ目へと吸いつかせる。拍子に漏れ出た少量の、蜜汁とは違う黄ばんだ液体を、塩辛さを覚えながら啜り飲む。もつと出していいと言葉に出して伝えた、その直後に割れ目上部の勃起した肉芽へと浅く噛みついた。

「ひうううう！　そ……んな、あつ……このままでは哲平につ。か、かかつて……かけてしまいううう」

いよいよ我慢の限界を迎えようとしているシルヴィアの上体が折れ曲がり、スカート越しにもたれかかってくる。彼女の震えと火照りが伝わって、哲平は尻肉を揉む手にいつその力を込め、ほじくる舌尖の動きを加速度的に速めていった。

「はぐっ……ううううう！　やあ……らっ、あ……ああああ……!!」

喘ぎ、堪えながらシルヴィアの手が再度、支えを求めるようにスカートの裾を握り締め、

持ち上げる。同時に、ドレスの胸元がはだけるかと思うほどに、たぷんと弾んだ。その魅惑的な光景が一気に視界に入り込んできて――。

真下から見上げる少年には、乳の下弦がたわむ様が、まるで焼けあがりのパン生地が一気に膨らんだかのように見えていた。

視界の開けた哲平はここぞとばかりに空いた左手で充血したクリトリスを押し転がし、右手でつかんだ恋人の尻の谷間、伸ばした中指で執拗に窄まりをほじくりつつく。

「はぶっ……らひて、いいよっ……んぢうっ、ちうッ！ れちゅ、うううっ……！」

いっそう強く押しつけた唇でぷっくり肉厚の陰唇を食みながら、舌先で幾重にも折り重なる肉ヒダを一枚一枚なめしやぶり、滴る蜜液を泡立てた。

「っふ、うう！ うア！ あっあアッ！ も、もおっ、らっ、あ、ああああ……っっ」

びゅっ……ぢよぼ、ぢよろろろろっ……。

（きたっ……シルヴィの……っ、おしっ……こ）
ビクビクと恋人の膣肉が激しく蠕動した、その直後。鼻先に勢いよくぶち当たった尿液の奔流のぬくもりと、独自の刺激臭とが、密閉されたスカートの内部に充滿する。

歩調を合わせたみたいに高鳴り続ける肉幹からの甘く切ない衝撃に、感覚を失くした哲平の腰もベッドの上で情けなく震えていた。甘ったるい恋人の体臭と尿液の刺激臭、こもった熱気に掻き混ぜられて、息が詰まりそうなのに不可思議な歓喜を覚えてしまう。

「あふうう、い、あああああつ！ 哲平っ見ないでっ……ふあ、あつあああ——ッ！」

ぶしっ！ ぢよぼぼぼっ！

一度堰を切った流れは、いくら下腹に力を込めたところで止められない。むしろ下腹部を意識したことでますます尿液の流れは勢いを強め、貼りつく哲平の顔面を滴るほどにあふれ出た。

「んぶっ！ んっ……！ ごきゅ、んんっ……！」

「ば、ばか、あああっ……飲んではず、っひう！ んうっアア……ッ！」

まるで陸に上がった魚のように跳ね回る安産型の尻を抱き寄せ、隙間なく貼りついた股間からこぼれる尿液を直飲^{じかの}みする。呼吸を確保するため。そしてなにより、なぜか無性にそうしたくてたまらないと訴えかける己が心の求めに応じて。

(しよっぱ……っ)

でも、さらついでに飲み下しやすい――。股間はこの上ない昂奮^{こうふん}と背徳でガチガチに強張り、ひっきりなしに脈動して、切ない疼痛を伝えてくる。なのに舌先に温かい液体が滑り込むたび、心は昂りながらもどこか安息めいた感情を覚えてもいた。

「っふ、あ……！ あー……っ。っふ！ ああ……またあつ、出るううっ……」

ぢよぼ、ぢよっ……ふしや、あああ……。

次第にか細くなる彼女の喘ぎに合わせたみたいに、少しずつ放尿の勢いが弱まっていく。陰唇のヒクつきは相変わらず続いていて、こぼれる尿液には多少の甘酸っぱさ――愛蜜の味わいが入り混じり始めている。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>